



Title	京都外国語大学におけるポルトガル語統一試験 CEFR 参照レベルと考查方法
Author(s)	アイレス, ペドロ; 彌永, 史郎; 上田, 寿美
Citation	Anais : Colóquio de Estudos Luso-Brasileiros. 2024, 50, p. 19-38
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/98454
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

【報告】

京都外国語大学におけるポルトガル語統一試験 CEFR参照レベルと考查方法¹

ペドロ・アイレス、彌永史郎、上田寿美

1. はじめに

本年度新規に採択された科学研究費のテーマ「ポルトガル語の理想的な言語教育シラバスに基いた科学的教育基盤形成」に基づき理想的言語教育シラバスに直結した成績評価の実態について考察したい。学生にとっても教師にとっても一大関心事である成績評価については、当然のことながら基準が必要である。授業シラバスには達成度の範囲を踏まえた計画が記され、これに基づく「学習範囲」のなかで、いかに問題を作成すべきかは各授業の担当教員に任されており、その考查内容はもとより、問題形式すなわち、記述式問題、客観式問題の割合なども担当者に一任されているのが現状である。

京都外国語大学では学生の達成度に関してCEFRの基準に基づいたベンチマーク（3段階：elementary, intermediate, advanced）と呼ばれる独自の達成基準を設けているが、基準自体は抽象的な表現によっており、具体的内容は担当教員の経験則に委ねられている。いっぽうで、達成度を考查するための具体的な問題作成については、教員相互の情報共有を密にする工夫も行われて来た²。

いっぽう京都外国語大学では「統一試験」という習熟度認定試験が2015年より学科ごとに行われており、その成績をクラス分けや授業登

-
1. 2023年度基盤研究(B)「ポルトガル語の理想的な言語教育シラバスに基いた科学的教育基盤形成」(上智大学 市之瀬敦、課題番号23H00646, 令和5年度～令和9年度) なお本稿は2023年6月24日の共同発表(アイレス、上田、彌永)に基づく報告書である。
 2. 京都外国語大学ブラジルポルトガル語学科では、2003年より学科教員有志の「問題研究会」が行われてきた。これについては本稿「5. 統一試験の実際」で論じる。

録要件、ひいては卒業要件として用いている。本稿では、8年目となったこの試験実施・作問実績を踏まえ、統一試験をはじめとする考查に関わる諸問題を概観し、現行の指標の一層の改善、科研テーマにある「理想的な言語教育シラバス」との関連を考察したい。

2. 統一試験：CEFRと大学独自の基準の関係

京都外国語大学で行われる統一試験は、2014年のカリキュラム改訂とともに開始された。本稿では制度的な意味については深く触れないが、CEFRと本学独自の資格試験との対応について以下概観したい。

表1にみられるとおり、京都外大では、「KUFVS言語共通ベンチマーク」という名称のもとに、各学年終了時の学習レベルをそれぞれのCEFR参照レベルに対応させている。また、1年次修了時点で外国語学部の学生には「統一試験」という習熟度認定試験が義務化されている。この試験は100点満点で、学生の専攻外国語習熟度を考查し、学生に対する学習へのインセンティブを与えるだけでなく、2年次以降の学生生活に大きな影響を与える要件として用いられる。たとえば2年次以降から選択できる科目が、インターミディエイト（中級）保持者、アドヴァンスト（上級）保持者というレベル別に分けられてい

表1 KUFVS統一試験とその他基準との対応関係

KUFVS言語共通ベンチマーク	1年次終了時 (A1)	2年次終了時 (A2)	3年次終了時(B1)	4年次終了時 (B2)
京都外大の科目履修基準	インターミディエイト	アドヴァンスト		
ブラジルポルトガル語学科	統一試験 55点以上	統一試験 80点以上		
CAPLE (外国語としてのポルトガル語検定試験)	日本では実施されず	準初級以上 (A2)	初級以上 (B1)	

るため、中級を取得していないと特定の科目が履修できない場合がある³。

具体的な制限について例をあげてみたい。たとえば統一試験55点以上でなければ、二年次以降に中級向け科目を選択することができない。したがって、2年次で初級となっている学生は、2年次のうちに外部検定試験A1レベル以上あるいは統一試験55点以上取得が必須となる。この条件を満たしていないと3年次になっても中級以上の学生向けに指定されている科目が履修できず、必要単位を満たすことができない。結果的に4年次になったとしても卒業に必要な単位全てを取得できないため留年が確定してしまうからである。

スペイン語やフランス語など他学科では、日本の団体が行う検定試験などをはじめとする、CEFR参照レベルに相当する外部の試験で認定を受ければ、統一試験に変えることも可能だが、ポルトガル語はA1に相当する試験が日本では実施されていないため、統一試験を受験する必要がある。当然、CAPLEのA2レベルの試験に合格すれば、統一試験中級とみなせるが、1年次を修了したばかりの初習外国語学習者には困難な水準といえよう。

外国語学習をそのまま当該外国での生活に直結させるというCEFRの画一的な基準のたてかたについても、日本におけるポルトガル語学習者にとって、必ずしも望ましいものとは言えないであろう。実際に、履修者全員が将来当該国で生活することを目的としているとは限らず、訪日旅行者への対応や、ポルトガル語テキストの読解あるいは、日本に居住するポルトガル語母語話者に対する支援なども重要な目的となりうる。したがって当該言語圏での生活を前提としたCEFRの「コミュニケーション」に重点をおいた「達成基準」が学習者の全ての要求を満たすとも言えないのである⁴。

3. 実際の科目履修についての要件としては、中級合格が条件として意味を持つ。試験の結果が初級の点数の学生は年に2回、7月と1月に行われる統一試験を受験して、できるだけ早く中級を取得する必要がある。

4. ブラジル文部省の行う検定試験 CELPE-Bras にも同様の問題がある。

したがって学内の統一試験は、こうした日本人のポルトガル語初習者の広範な目的に応じうる、いわゆる語学力、すなわち初習外国語の単なる運用能力ではなく、発展性のある基礎的学力がどの程度に達しているかを、科学的な視点から考査する必要に迫られている。

3. CEFR の基準と学内統一試験の基準

そもそもCEFRという基準は2001年に欧州評議会により発表されたもので、多言語・多文化が共存するヨーロッパにおける言語政策を推進する過程で生まれたものである。以後20年以上が経過した今日、CEFRは外国語としてのポルトガル語教育のプログラムやカリキュラムの立案、その教材作成、ならびに言語能力評価という目的のための参照資料となっている。

周知の通り、A1レベルは言語使用の基礎レベルとされており、この水準の学習者は、聞き手の助けを借りながら、定型文およびきわめて頻繁に用いられる語彙や表現を使って日常的な場面で交流する能力を有するものとされている。

いっぽうで、A2 レベルでは社会関係を示す基準がみられる。このレベルにおいて学習者は日常の簡単な状況を自分で処理する能力が必要とされる。われわれの統一試験においてもこの観点からA2レベルの言語能力を考査する問題が用いられる。たとえば以下ようなものである。

例1： A1 — Nível básico do uso da língua.

問題 下線部に入る正しい語を選びなさい。

1. Ele gosta _____ cinema brasileiro.

① por ② em ③ de ④ ao

2. Tu tens _____ lavar as mãos.

① por ② em ③ de ④ ao

例2： A2 — Competência pragmática para lidar com situações simples do quotidiano.

問題 日本語訳を参照して括弧内の語を並び変え、不要になる語を1語選びなさい。

1. O ladrão levou 【(a) que (b) o (c) todo (d) tudo (e) estava】 na casa. 泥棒は家にあるもの全てを持ち去った.

2. A senhora 【(a) a (b) perguntou (c) ele (d) quem (e) onde】 as horas é a nossa professora. 彼が時間を尋ねた女性は私たちの先生です.

さらにB1レベルの問題については、以下に引用するCAPLEのB1レベルの問題とほぼ同様な読解の問題を統一試験で用いる⁵。

例3： CAPLEのB1レベルの問題

CAPLE – Centro de Avaliação de Português Língua Estrangeira

DEPLE – Compreensão da Leitura

Questões 1-5

Depois de ler o texto, assinale com um V (verdadeiro) ou um F (falso) as afirmações 1-5. Escreva as respostas na folha de respostas.

Sou aluno do curso de Educação Física e Desporto e como futuro professor de Educação Física fiquei alarmado com a opinião da jovem de 13 anos, Catarina Barata, na edição de 17 de Janeiro. Pelo que percebi, esta jovem tinha problemas com a professora e não se deve condenar uma disciplina por causa de uma professora incompetente. Aliás, existem na escola os directores de turma para resolverem este tipo de questões. Todos os alunos têm direito às aulas de Educação Física e a professores de Educação Física competentes. A Educação Física é uma questão de cultura. Os conhecimentos que se adquirem nas aulas desta disciplina não se aprendem em nenhuma outra, e não estou a falar de "jogar à bola" ou "dar cambalhotas", pois só pensam assim as pessoas pouco esclarecidas! As aulas de

5. <https://pt.scribd.com/document/234883568/Modelo-Exame-DEPLE#>より取得. 2023/08/22.

Educação Física podem dar grandes contributos não só a nível das competências motoras necessárias para o dia-a-dia, como também a nível psicológico, por exemplo, a alunos com insucesso escolar. Se tivessem aumentado a carga horária da disciplina de Educação Física há alguns anos atrás, provavelmente muitas pessoas não teriam os problemas de concentração e coordenação que têm e não existiriam tantos acidentes

1. O aluno de Educação Física ficou muito agradado com a opinião da jovem.
2. O aluno diz que não se pode condenar uma disciplina só porque os alunos acham que o professor é incompetente.
3. A Educação Física, na opinião do aluno, valoriza o desenvolvimento global dos alunos.
4. A carga horária de Educação Física foi aumentada há alguns anos atrás.
5. O aluno responsabiliza o grande número de acidentes rodoviários pelo aumento da carga horária da disciplina de Educação Física.

CEFRの原則によれば、学習者は私的・公的、学校、職場での人間関係などさまざまな環境の異なる文脈において他の話者との相互関係を維持するだけの言語能力を求められるとされる。

例として CAPLE で掲示されている上記の問題は、模範的問題の一つとして示されていると考えてよかろう。しかし外国語としてポルトガル語を学習している者にとって、とりわけ日本の学校制度で育ってきた者にとっては、テキストで取り上げられているポルトガルの学校制度の中で起こりうる問題については、想像を超えた部分があることも事実ではなかろうか。

おそらくヨーロッパ全体では同様の制度なのかもしれないが、初等教育以来日本の体育教育に慣れ親しんだ日本人にとっては想像の困難な問題が提起されている。特に、恐らく何かの投書からの引用という体裁で問題文が書かれていると考えられるが、虚構とは言え実名をあげて個人がこの種の問題を論じている文章が公にされていることが違和感を与えている。総じて我々の身近なところではフィクションといえども個人情報保護をかたちで扱われるはずの話題が試験問題の文章として取り上げられることに大きな違和感があろう。さらに本文

中の *acidentes* という語も曖昧に映る。解答の選択肢を読めば「交通事故」のみを示していることが察せられるであろうが、学校内の事故、とりわけ体育授業の事故がしばしば話題になる昨今の日本の状況からすれば、学校内部の事故を除外する見解自体が日本の学校事情に馴染まず、判断に苦しむ。さらに最終的な解答は「V:正」「F:誤」の一文字を書くだけということになれば、内容は十分に理解せずとも解答は可能であり、客観式問題の常として、出題者の意図が十分に反映するかどうか疑問が残る。

また、1999年以来、本学で実施してきたCAPLEにおいては、時に、DEPLEの読解問題で問題と解答用紙が正しく一致しない、解答用紙に解答欄がないなどの不備が見られることもあった。

以上、実例から明らかなように、日本人学習者のポルトガル語能力の考查を目的とする以上、京都外国語大学の統一試験では受験者の言語外的な知識に依拠するような内容を含まぬ配慮が求められる。こうした諸問題を踏まえれば、問題作成者が一般的に語学力の考查に集約した内容の問題を作成する必要があることもおのずから明らかであろう。

文章の読解力考查については、京都外国語大学統一試験で用いられる読解問題には、受験者が4年次生も含まれるという実情に鑑み、難易度がやや高め、CAPLEのB1レベルに相当するレベルの問題を出題しており、以下のようなものがある⁶。

例4：読解問題（CAPLEのB1レベル）

問題 Leia o seguinte texto português e responda à Questão:

Continua, por vezes, a pensar-se que a disciplina de Educação Física é um tempo perdido na formação de crianças e jovens. No entanto, basta observar um recreio numa escola para ver que as crianças correm, atiram a bola e atropelam-se sob o olhar atento e tolerante dos vigilantes. Seguramente na aula irão estar suadas, mas mais atentas. A atividade física é uma forma de

6. この問題例は、実際に用いられたものではない。問題の形式、内容、レベルを示すための例である。

preservar a saúde e de ajudar inclusive crianças e jovens com incapacidades físicas ou cognitivas. Ao integrá-las, estamos a criar um círculo de amigos que os irão ajudar a integrar-se na sociedade, uma sociedade para todos e, como tal, mais rica.

A disciplina de Educação Física é muito importante para o bem estar físico e psicológico e, por isso, os professores têm um papel importante na motivação dos seus alunos que estão numa fase de pleno desenvolvimento. Esta disciplina permite também a realização de diversos desportos coletivos que estimulam o trabalho em equipa e a interação com os outros.

Questão:

Leia as afirmações em japonês 1 a 6 e marque no espaço de respostas o V, quando o seu conteúdo corresponde ao teor do texto, e o F, quando a afirmação não corresponde ao conteúdo do texto.

1. 子供や若者が体育という教科は時間の無駄と考えることもあるが、体育は見学だけでも意味がある。
2. しっかりとした見守りのもとで、子供達がボール遊びをすれば体を鍛え、運動神経を養い不慮の事故防止にもよい。
3. 体を動かすことは、健康を維持するためになり、心身に問題のある子供や若者の健康維持に役立つ。
4. スポーツを通じて人々は友情を育み、心身に問題のある子供や若者の社会への融和を促し、社会はいつそう豊かになる。
5. 体育という教科は発達過程にある青少年の心身の健康のためにきわめて重要であるから、体育教師にとっては生徒のやる気を高めることが重要だ。
6. 体育教育で個人競技ばかりに集中しても、チームでの作業や他人との相互関係を高めるのにそれほど有益ではない。

Respostas: (実際にはマークシート解答用紙上で回答させる)

1. 【 】 2. 【 】 3. 【 】 4. 【 】 5. 【 】 6. 【 】

4. 統一試験の内容

このようにCEFRの基準をはじめ、それをもとにした本学のベンチマークも実際の学力の内容について、今後学科を主体にその内容をより具体的にしていく必要がある。現在のところ学力としての詳細な

内容は、たとえば義務教育の英語教育における学習要領のようにははっきりと定められてはいない。文法、語彙、と言ったような、昔から言われている「基礎的学力」について、初めて学習する外国語とはいえ、短期間で学力をつけねばならぬ点が、義務教育における英語教育とは異なる。言語の四技能を平均的に涵養していく必要は当然であろうが、いっぽうで正しく読み書きができるということが、e-mail などの手段が発達するにつれて一層重要になっていることは疑いない事実である。我々の目的は1年程度の学習歴がある初習の学習者がおよそ8割の正答率を得られるような内容の試験を作成することである。こうした目的に沿って試験に含めることができるいわゆる「文法事項」を考えねばならない。文法事項に関しては、直説法・接続法という法によって達成度を分けることがしばしば考えられる。動詞の時称形式を中心に考えるのが試験の範囲を区切るのに都合がよいと思われる。さらにモダリティ、アスペクトの理解、というような目標をたてておけば、助動詞とその時称の関係も問題作成上、指針になりうる。しかし言語のコミュニケーション機能を踏まえるとこうした単純な分割方式は当然検討の対象となる。

こうした広範囲の文法的指標を習得目標として具体的に設定して行くことが求められていくことは間違いないが、合理的な範囲設定には困難がつきまとう。

その意味では範囲を考えやすい習得目標としては、すでに研究の進んだ頻度別の語彙研究の成果を利用した「語彙力強化」は目標として示しやすいと言えよう。なぜなら試験問題の質、レベルを考えるために、語彙の範囲を決めておくことがやはり必要だからである。頻度順の語彙表となると、(1)リスボン大学言語学研究所で編成された語彙表 LMCPC (Léxico Multifuncional Computorizado do Português Contemporâneo) が目安になるだろう。もうひとつは (2) Português Fundamental (2,200語ほど) である。ちなみに LMCPC を頻度順で 1,650 以上の語を集めるとほぼ 1,000 語になる。この中に含まれる動詞は例えば (頻度 ≥ 1650) 234語となり、並べてみると、どれをとっても確かに基礎的という意味で納得のいくものである。しかし200以上の動詞について、それぞれの細かい regência を修得することを想定すると、1年間の学習で身につけるには案外ハードルが高いと言える。問題作成の立場からすると、それぞれの動詞の細部にわたって P E

(Português Europeu)、PB (Português Brasileiro) の用法をつぶさに記述した結果に準拠して問題を作成するのが手っ取り早く、さらに根拠も明確でよい⁷。問題作成には、とくに PE、PBの差異を中和すべく注意が必要な場合、語彙のサイズはひとつの重要な指針となろう。学生に語彙力の急速な強化を1年間で期待することには無理もあろうし、また英語からの類推などもあまり働かない場合が多い。実際の達成度を考慮すれば、1学年の学習を条件にすると学識語などはもちろんのこと、実際用いることのできる語彙サイズは相当に限られた範囲であることを認識して、教員側は問題作成に臨まざるを得ないのが実状である。

さらに文語・口語の差に関しても問題作成上は考慮しておく必要がある。語彙のサイズについて考えるとき口語のポルトガル語コーパスである Português Fundamental を忘れてはならない。これは全部で2,200語ほどの基礎語彙であるが、たとえば動詞が387を占める。さらに頻度順に並べて口語と文語を比較してみると、文語コーパスの(LMCPC)と口語コーパス(PF)とは、語によってその重要度が大きく異なる場合があり、語積すなわち文構造によって異なる意味をどの程度まで問題に盛り込めるかは、さらに細かな基準を作成する必要があることを示唆している⁸。

5. 統一試験の実際

京都外大で実施している統一試験の例を一部紹介し、その問題点を考察したい。問題は全て選択式の客観式問題で行っており、解答はマークシートに記入する方法をとっている。これは受験者の数が100人を超えることもあり、およそセンター試験的な客観式問題で対処する方法が求められるからである。また当然のことながら、入学試験と同様、

7. Verbos fundamentais do português (2018).

8. たとえば、formar という動詞は、LMCPCでは上から数えて18番目だが、PFでは140番目に位置し、文語には頻繁に用いられるが口語ではそうではない。また crerはその反対に口語的な傾向が強く、PFでは96位と100語以内に入るが、LMCPCでは283番目で1,000語の語彙表から漏れるので、実際の問題作成上はこうした口語と文語との差異に関しても、初学者を対象とするだけに合理的な解決が求められることになる。

問題に誤植などがあってはならず、万全を期してやらねばならない責任の重い作業である。

こうした体制については2000年代の初めから、問題研究会と称して有志の教員が学科内で集まり、各学期に授業で用いた問題を俎上に載せ、互いに批判しあうという勉強会を続けてきた。したがって問題の質に対する考え方と作成方法については、統一的な意識があったことが幸いしている。授業内で行う試験は、複数の目で見直すと問題点が明らかになるので、こうした日常的な努力はあきらかに試験問題の作成には資するところがある。

5.1. 音声に関する問題

この種の問題は実際のところあまり多くの種類の問題はなく、毎回似通った問題になりがちである。カタカナ発音から脱するべく日常的に指導は受けていても、未知の言語の音をあらたに習得するのは思いの外困難な課題であることは間違いない。音声記号を用いた問題を出題することも無論可能であり、かつてそうした問題を出題したこともあった。

さらに会場で音声を実際に再生して聞かせることも容易であるから、工夫次第でさまざまな出題形式が考えられよう。音は習得すべきものが限られているため、作問は比較的容易で学習者の学力を判断できる。現在のところはバリエーションが限られているが、より多角的な問題形式を導入していくことが求められる。

以下、正書法上の綴りと実際の音素との関連を習得しているかどうかを評価するための問題例を示す。

例5：正書法と音素の関係を問う問題

問題 下線部の発音と同じ音を含む語を選べ。

1. música

- ① acima ② dia ③ onze ④ mágico

2. exame

- ① achar ② casar ③ expor ④ xaile

音声を用いた聴解力の考査は作成が比較的簡単である。他方、発表能力については、CALL教室などを使用し多人数の発話を一気に録音すれば評価したいは極めて簡単である。さらに携帯端末がここまで一般化している現在、標準的に付属している録音機能を利用すれば、録音した音声を提出させるという方法も技術的には十分に可能であり、要点を絞った問題を用意すれば評価は容易である。以下典型的な問題例として、授業中にはすでに利用されている簡単な方法を例示する。

例6：発音の問題

問題 以下の語句を読み上げ、指定するURLから音声ファイルを投稿せよ。各項目の最初に「いちばん、にばん…」と日本語で言うことからポルトガルを録音すること。

1. Os meus amigos estão ali na praia.
2. Já são 22 horas. Vamos apanhar o táxi.
3. O Carlos anda um pouco doente.

この種の問題は、投稿ページへのリンクを許可するタイミングなど、実施に関して若干の技術的工夫が必要ではあるが、十分に問題として成り立つ。

5.2. 名詞と冠詞：性・数の一致：選択問題

冠詞と名詞の性・数一致についての基礎的な知識を問う問題である。記憶を問う問題でもあるが、ある程度踏み込んだ学習を前提とした内容となる。以下の例のように正書法上要求される点も踏まえた問題とするように作成者側の留意が必要となる場合も多い。

例7：名詞の性に関する問題

問題 下線部に入るべき定冠詞あるいは不定冠詞の正しいものを選び。

1. ___ Cinema Ideal fica no centro da cidade.
① O ② Os ③ A ④ Uma

2. Temos de resolver ___ problema.

- ① um ② uns ③ uma ④ umas

5.3. 名詞と形容詞：性・数の一致：選択問題

形容詞と名詞の性・数一致を主要なテーマとする問題例である。形容詞の位置、名詞の多義性も踏まえた内容である。名詞を限定する形容詞の役割とともに、名詞の意味についても性により異なる場合があるという理解が必要な問題を含めるような工夫が作成側に求められる。

例8：名詞の性と多義性に関する問題

問題 下線部に入るべき形容詞の正しいものを選び。

1. cidades _____

- ① capital ② velhos ③ modernos ④ principais

2. papéis _____

- ① finas ② altas ③ fáceis ④ grossas

5.4. 形態的知識:動詞の活用形式と文構造：選択問題

動詞の活用形式について、基本的な運用能力と文構造に関する問題である。対応する日本語から、意味と時称などを正しく活用形に反映できるかどうかを問う。基礎的なポルトガル語運用能力と日本語の理解力も同時に問うオーソドックスな問題形式である。

例9：動詞の形態に関する問題

問題 後続する日本語の意味を参考にして下線部に入るべき正しい動詞を選び。

1. Ele _____ professor numa universidade. 彼は大学の先生だった。

- ① fui ② era ③ permanece ④ fiquei

2. O Rui já _____ em Macau. ルイはマカオに行ったことがある。

- ① estive ② esteve ③ fizeste ④ fez

5.5. 聴解問題

聴解問題の1例として、ダイアログの問題を示す。音声で以下の問いを聞かせ、返答としてよいものを選ばせる。選択肢 1~4 も音声で与える。実際の試験の時には、受験者はメモを取ることは許されるが、基本的には質問、返答ともに文字では問題用紙には表記されない。ここではダイアログのみを例示したが、もう少し長めのモノログという形で相当の長さのテキストを聞かせて、それに関する質問を音声で行うという方法も行うことがある⁹。

例10：客観式聴解問題：内容の理解とコミュニケーション能力

問題 問いに対する返答として1-4のうちもっとも適当なものを選べ。

— Como é que tem passado?

1. Tenho passado dois anos.
2. Passei lá por acaso.
3. Fiz grande esforço.
4. Mais ou menos.

6. 解答用紙

解答用紙はマークシート方式を利用し、採点は自動で行う¹⁰。解答用紙のレイアウトは自由に行え、自動送りのスキャナーがあれば、正確な点数処理が短時間で行え、効率的である。今後記述問題を取り入れるとなると、解答用紙の形式から採点の方法まで相当の見直しが必要となる。全体の点数計算などについては別紙の筆記解答用紙を用意し、学籍番号・氏名は受験者が書き込み採点者が点数をマークシート

9. 最近では良質の人工音声があるので、主に Text to speech を利用してサウンドを生成し、インフォーマントチェックを経た録音音声を用いて聴解試験を行っている(2023年現在)。

10. 採点は市販の専用のソフトウェアで行う。

に記入するなどの工夫をすれば大きな支障なく可能と考えている。

学籍 番号	201	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩
	UH00	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩
		①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩
I	1	a	b	c	d						
	2	a	b	c	d						
	3	a	b	c	d						
	4	a	b	c	d						
II	5	a	b	c	d						
	6	a	b	c	d						
	7	a	b	c	d						
	8	a	b	c	d						
	9	a	b	c	d						

7. 評価について

本学における統一試験の概ねの傾向を示すため、数年間遡って2019年度から2021年度実施の点数を平均的に表したサンプルを以下の図2に示す。統一試験の難易度については、A1~B1程度の問題が混在しているため、一年次終了時点での学生のレベルに見合った試験であれば、平均点は大体60点~70点程度におさまることになる。以前はある程度高得点の学生に対しては、認定証というようなものを学科名で発行していた。この種の形式的なものがある程度のインセンティブになる可能性もあると考えられ、また、学生には事務的に点数のみ通知されるだけよりもよいかもしれない。

図1 解答用紙（見本）

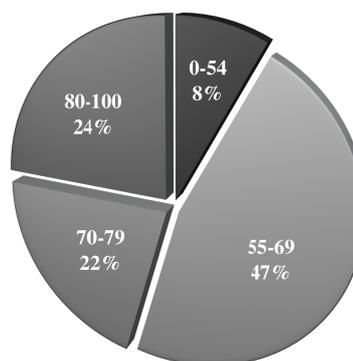


図2 統一試験得点の割合 (平均的結果)

こうした結果をわかりやすくpdfに出力して送る、あるいは紙で印刷して渡す、などの方法により、学生の手元に形として残る「認定証」といったものが多少の達成感につながるのではないかと考えられる。実際に希望する学生もいるので、実施については柔軟に考えるのがよいであろう。

8. 今後の展望

以上、京都外国語大学の統一試験について概略を紹介した。外国の基準で出題される資格試験は、当該国での生活を基準とした明確な目的があるだけに、どれも一言で言えば西欧的な常識とはやや縁遠い日本で生活する初学者には難しい面があることは否定できない。実際、国際的な資格試験で出題される問題については、西欧的視点で出題・評価される点が、日本の学習者にとって一種の壁となりうる。文化的なコンテキストに依拠した問題文の理解には言語外的な知識が求められ、日本の初学者にとっては難解となりうることは、本稿で実際の問題を通じて詳しく論じた通りである。

このような状況を踏まえると、CEFRの基準は大いに参考すべきとはいえ、より言語能力の考査に特化した、日本の学習事情に合わせた資格試験が今後求められることになるのではないか。特にポルトガル語の語彙の多義性を考査の対象とするには、日本語への翻訳に関わる問題を若干なりとも盛り込むことが効果的である。

なお、学科では必修事項、基準として求めるべき、最低限の履修内容を具体的に提示するため、様々な補助的な教材を提供して来ている。基礎単語1,000語のアプリ、動詞活用、接尾辞ドリルなどを開発して来たが、この10～15年間を振り返ると、日進月歩の技術の中で、電子的な手段をもちいると新しい技術に更新されて使えなくなるような極端な場合もあった。インターネット上での使用環境については、今日ではPCのみならず携帯端末上での動作を保証する必要もあり、今後の急速な技術変化に対応していくことは必ずしも容易ではないかもしれない。しかしながら、原材料たる音声データ等はそれ自体が無に帰することはないので、しかるべく保管し技術変化にそなえ、柔軟に対応していくことが必ずや可能と信じている。

参考までに、これまでに学科内で開発してきたアプリ等を簡単に紹介しておきたい。これらは特に重要度が高いものということで初年度より学生の教材として利用するので、間接的に統一試験の試験範囲という意味合いを持ってきていることも確かである。これらのアプリは以下の Landing Page よりリンクしている。

https://cppq.org/portal_PA.html あるいは
<https://sites.google.com/view/canaldelb/ホーム?authuser=0&pli=1>

(1) 音声付き動詞活用フラッシュカード

https://cppq.org/conj_verbos/entrada.html

動詞の活用を音声付き動画で学習する。PE、PB両方の動画が用意されている。主要な動詞が全部で10動詞ある。

(2) 音声付きポルトガル語基礎語彙1000語フラッシュカード

https://cppq.org/flash_card/entrada.html

基礎語彙をLMCPCの頻度順に1,000語、PE、PB両方の発音で、英語と合わせて動画として収録・アニメーション付きなので、学習者は繰り返し視聴することで習得が可能となる。

ポルトガル語フラッシュカード (別バージョン) .

<https://sites.google.com/view/canaldelb/ホーム?authuser=0&pli=1>

(3) 二言語同時学習 接尾辞による語彙強化：20の基礎ルール (新版)

<https://cppq.org/suffix-html/index.html>

初版は2011に公開されたが、その後の技術変化に対応した新版で仕様を変更し、より直感的な学習を可能とした。周知の通り、いわゆる学識語の範疇になればなるほど、正書法上、英語とポルトガル語の語幹の共通性が高くなり、それによって接尾辞の対応を知れば、語彙強化はきわめて容易になっていく。無論他のロマンス系諸語も同様である。しかし、音声的に見ると同じ語幹の発音が言語により相当に異なるため、ロマンス系諸語が英語の発音に大きく干渉することも多い。これをあらためて見直すという意味も込めて、本学ではじまった二言語同時学習のなかで考案されたプログラムである。英語の接尾辞の知識を一気にポルトガル語に変換し、正しく英語の発音、ポルトガル語の発音を学ぶことが出来る。2言語同時学習プロジェクトにしたがって、英語を中心にポルトガル語、フランス語、イタリア語、スペイン語が対となっているが、スペイン語・英語の新版は技術的問題の解決を待っている状態である。

(4) ポルトガル語文法用語小辞典

<http://gelp.ciao.jp/GLOSSARIO/>

この小事典は学科として開発したものではないが、文法用語に関して、ポルトガル、ブラジルのnomenclaturaにしたがって訳語と解説を

施したものである。公開 (2013) 以来学会諸氏の参加を得て、充実してきている。

上記諸アプリへリンクするLanding Page のQRCode.



参考文献

- 彌永 史郎 (2005) 『ポルトガル語発音ハンドブック』 大学書林.
- 彌永史郎 (2018) 『ポルトガル語動詞用法辞典 1~3巻』 西東舎.
- 彌永史郎, ペドロ・アイレス (2018) 『基礎ポルトガル語動詞 1~3巻』 西東舎.
- 彌永 史郎, 石川保茂, ペドロ・アイレス, 村松英理子 (2013) 「二言語同時学習; 接尾辞による語彙強化ドリル(英 — 仏・伊・葡・西) 開発」 『平成25年度、教育改革ICT戦略大会資料』 公益法人私立大学情報教育協会, p. 214-215.
- Trim, John et al. (2004) 『外国語教育 II 外国語の学習、教授、評価のためのヨーロッパ共通参照枠』 吉島茂 他訳・編 (2004) 朝日出版
- Cunha, Celso; Lindley Cintra (1986) *Nova Gramática Do Português Contemporâneo*. Sá da costa.
- Ferreira, Teresa S., et al. (2019) *Gramática Português Língua Não Materna Níveis A1 e A2*. Porto Editora.
- Ferreira, Teresa S., et al. (2019) *Gramática Português Língua Não Materna Níveis B1,B2 e C1*. Porto Editora.
- Camões, Instituto da Cooperação e da Língua, IP, *Programa de Português (professores) — Nível A1 — Ensino Português no Estrangeiro*, https://www.instituto-camoes.pt/images/ProgramasEPE/Professores/Programa_EPE_A1.pdf (参照 2023-06-20).
- Camões, Instituto da Cooperação e da Língua, IP, *Programa de Português (professores) – Nível B1 – Ensino Português no Estrangeiro*, https://www.instituto-camoes.pt/images/ProgramasEPE/Professores/Programa_EPE_B1.pdf (参照2023-06-20).

«Sumário»

**Exame unificado na Universidade de Estudos Estrangeiros de Quioto —
Níveis de referência de CEFR e a avaliação**

Pedro Aires
Shiro Iyanaga
Toshimi Ueda

A Universidade de Estudos Estrangeiros de Quioto (UEEQ) realiza em todos os seus departamentos pelo menos uma vez por ano, desde 2015, um exame de avaliação denominado Exame Unificado (EU). A avaliação correta de que resultam as notas finais dos alunos, condicionando a sua formatura, constitui um dos assuntos de maior interesse na vida académica, tanto para os alunos como para os docentes. É necessário, por isso, uma consideração constante e rigorosa dos seus critérios para manter os níveis requisitados conforme os *sillabi* de cada disciplina.

O EU é obrigatório para todos os alunos no final do primeiro ano letivo e visa como meta, em princípio, os níveis A1 e A2 do CEFR. Por outro lado, o EU pode ser também realizado por todos os estudantes até ao quarto ano, necessitando assim de algumas questões com dificuldade mais elevada. Nesse sentido, o EU também contém questionários do nível B1, especialmente na parte de leitura e compreensão oral. Retrata-se também a situação atual do EU, propondo-se simultaneamente a criação e remodelação das metas de estudo para corresponder melhor à situação do ensino do português como língua estrangeira.